

# 森の通信

Museum and Cultural Institutions of Miyazaki Prefecture

宮崎県総合博物館だより

第19号

発行日/平成6年5月1日

発行 / 宮崎県総合博物館 〒880 宮崎市神宮2丁目4番4号 TEL (0985) 24-2071

アール・ヌーヴォーの華

## アルフォンスミュシャ展

19世紀末から今世紀初頭にかけて、絵画、グラフィック・アート、彫刻、工芸、建築、室内装飾、そして日用品までを網羅するアール・ヌーヴォーと呼ばれる一大芸術運動が展開されました。

この運動の代表的な人物であるアルフォンス・ミュシャは、1860年にチェコスロバキアに生まれました。青年期の修業時代をウィーンやミュンヘンで過ごした後、当時、産業、芸術、ファッションなどのあらゆる面において新しい気運がみなぎっていたパリへと向かい、ポスターや挿し絵などの制作に励みました。1895年、当代の大女優サラ・ベルナルを描いたポスターが、パリ市中に貼り出されるやいなや、ミュシャは、一夜にして人気作家となり、以後ヨーロッパの美術界で華々しい活躍をみせました。しなやかな曲線と、淡く、美しい色彩で描き出された作品の数々は、華麗で優美な魅力をたたえ、今なお多くの人々を魅了し続けています。

この展示会は、次の四つの時代に大別して、ミュシャ芸術の全貌に迫ろうとするものです。

### ①ウィーンでの初期修業時代

彼の生涯において主要なテーマとなった劇場や装飾的な作品に出会った時代

### ②パリ時代

サラ・ベルナルと出会い、彼女のポスター、舞台衣装、アクセサリなどを手がけて爆発的な人気を博した。グラフィック・アートの確立へと彼を導いた時代

### ③アメリカ滞在期

アメリカの社交界に歓迎され、教育者としても活動しながら、スラブ民族をたたえる連作の構想に着手した時代

### ④晩年のプラハ時代

祖国スラブ民族への愛をテーマに絵画制作に専念した時代

### 展示内容

油彩画、水彩画、パステル画、リトグラフ、ブロンズ、アクセサリ、書籍等約260点。(高橋)



夢 (カラー・リトグラフ)

### 会期

平成6年5月28日(土)～7月10日(日)

午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日＝毎週月曜日

### 入館料

大人 900円 (700円)

高・大生 600円 (400円)

小・中生 400円 (200円)

※( )内は、前売・団体(20名以上)の料金



宮崎の歴史をつくった人々

ジャーナリズムの先鋒 — 若山甲蔵

明治時代後期から昭和時代中期にかけて活躍した若山甲蔵は、新聞の編集者や郷土史家として、宮崎県の近代史のなかで異彩を放ったジャーナリストとして忘れることのできない人物です。

本県の政治・経済から教育・文化・芸能にいたるまで、幅広い見識と鋭い論評、そして旬刊紙「宮崎県政評論」の発行をはじめとする様々な著作出版活動など、多彩な活動のわりには、その名が十分知られているとはいえません。そこで、彼の足跡をたどりながら、その業績について考えてみたいと思います。

若山甲蔵は、1868(明治元年)年、徳島に生まれました。少年時代に、父敏蔵より漢学、兄淳蔵から文章の手ほどきを受け、後に関西法律学校(現・関西大学)に学んでいます。24歳の時、本県新聞界草分けのひとつ「日州日日新聞」主筆の兄淳蔵をたより、宮崎に転居し、いよいよ新聞記者の道を歩みはじめることになりました。33歳の時には、創刊された「日州独立新聞」の主筆に迎えられました。後に宮崎県で最初の新聞である「宮崎新報」に移籍しました。甲蔵の論評は、切り口の鋭さとともに大衆的でわかりやすく、論壇に一大勢力をきずきましたが、同紙の廃刊とともに、既成新聞からは身を引くことになりま

した。しかし、その後も本県で最初の教育団体である「日州教育会」の機関誌「日州教育雑誌」の編集をいってに引き受けたり、1919(大正8)年からは旬刊紙「宮崎県政評論」を自ら創刊し、以後在野の立場から県政や社会問題について積極的に筆をふるうなど、ジャーナリストとしての気骨を生涯忘れることはありませんでした。また、一時、県立



若山甲蔵

宮崎図書館長にも就任し、本県の様々な文化財の調査研究にも力を注ぎ、宮崎の歴史に関わりの深い書物をやさしく解説した「日向文献史料」など多くの名著を残しました。それらの中に、新聞記者として培った鋭い眼差しとともに、第二の故郷である宮崎の風土と文化をこよなく愛した、温かで庶民的な姿を感じとることができます。

なお、今回の展示にあたり御協力いただいた若山光宣氏・高鍋町立図書館に感謝申し上げます。(津隈)

〔展示期間：～平成6年7月17日(日)〕

みょうけん 妙見遺跡(えびの市)の調査

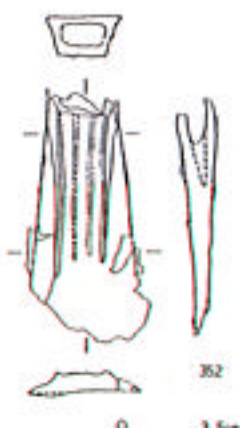
今回、埋蔵文化財センターに展示されている土器・石器・鉄器などは九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設に伴って発掘調査された妙見遺跡(えびの市大字東川北)から出土したものです。平成3年5月から12月にかけて県教育委員会が4,300㎡調査しました。遺跡は川内川の支流の小河川である関川に臨む標高約283mの丘陵の緩傾斜面に立地し、谷底面との比高差は約15mです。

まず当遺跡に人が住み始めるのは、土器が作られる以前の狩猟・採集の時代である旧石器時代(今から2万数千年前～1万2千年前)で、ナイフ形石器12、槍として使用された剥片尖頭器1、三稜尖頭器1、細石刃13などが出土しました。えびの市内では初の旧石器で注目されます。

次の土器が作られ、弓矢を使用する狩猟・採集の時代である縄文時代早期(約1万年前)には石蒸し料理跡と推定されている集石遺構が13基検出されました。それと共に口縁部内面に押型文が見られ、押型文土器の最終段階である手向山式土器を主体として、燃糸文あるいは貝殻文を施した塞ノ神式土器、胴部に燃糸文を、口縁部に櫛描沈線文・連点文を施した平樽式土器などが出土しましたが、竪穴住居は見つかりませんでした。石器では打製石鏃が518点と多く、狩猟に対する依存度が高いことが推定されます。また環状石斧が出土しており注目されます。

古墳時代の5世紀末～6世紀中頃(約1,500年～1,450年前)になると竪穴住居が42軒も作られます。住居の規模は10㎡(6畳1間)以下の小形のものが多く、最大規模でも2号住居の15.7㎡(畳9.5枚)です。

住居跡からは灰色の硬質の須恵器の壺・甕、赤色の軟質の土師器の壺・甕・坏などの土器以外に鉄器も出土しています。土師器の中には丹塗りを施しているものもあります。右図の2号住居出土の鑄造鉄斧は溶かした鉄を鑄型に入れて作られた斧で、県内初の資料として注目されます。長さは13.2cmで、袋部の断面は台形、袋部から刃先部に向かって撓状に広がり、袋頭部と側縁部に突帯を4条有します。



出土鉄斧実測図

以上のように在地の墓制である地下式横穴墓を造営した古墳時代の山間部の集落の様相が明らかにされたことは大きな成果でした。(長津)

〔展示期間：平成6年5月25日(木)～7月31日(日)〕



## 魚を餌とするタカ ミサゴ

全長約60cmあまり、羽根を広げると170cmにもなろうかという大型のタカのみサゴは、世界的に広く分布しています。体は、上面が黒褐色に対し、顔から腹など下面は白色で特徴があります。2月頃造巣し、産卵、4月にはふ化して50日あまりで巣立ちます。

このタカの餌は、魚類が主食でボラ、スズキ、トビウオ、イワシ、チヌ、ナマズなどを捕らえた報告があります。上空から魚影を見つけると急降下し、水面に飛び込んで魚を捕らえます。大きい魚は、両足で、たてに持って運びます。このため、巣は、周辺に魚をとることのできる海岸や湖沼、河川の絶壁や人がたやすく行けないような松の樹上などにつくります。

近年、世界的にこのみサゴは、急減しています。「日本の絶滅のおそれのある野生生物(レッドデータブック)」では、危急種(絶滅の危険が増大している種)にランクされています。この減少は、餌の魚類の化学的汚染が主因とされていますが、そのほかにも営巣地付近への人々の接近による巣づくりの放棄や営巣木の伐採など本種を取り巻く環境が悪化しているためです。

世界的な分布種で1属1種のタカ。生息域で生態系の頂点に立つ鳥。杜撰なダイビングをするみサゴの姿は、

再び、帰ってくるのでしょうか？



みサゴの標本

この個体は、1993年7月30日の午前中、宮崎空港の海側に落鳥していたもので、発見時には既に死亡していたものです。原因は良く分かりませんが、航空機に接触した可能性があります。学術的価値の高い種のため、本館で複製化したものです。(岩崎)

## 古代住居(西都原資料館)

修復前



作業の様子



修復後



西都原資料館の屋外に展示してある古代住居は、昭和41年に、東京国立文化財研究所長関野克氏の設計指導によって復元されたものです。奈良県から出土した青銅製の鏡(家屋文鏡)を参考に古墳時代の住居を再現してあります。県内外から訪れる小学校の修学旅行生の多くは、この古代住居を背景に卒業アルバム用の全体写真を撮ります。西都原資料館を代表する重要な資料の一つです。

復元後これまでに、昭和49年と昭和61年の2度、屋根の全面葺き替えを行っていますが、昨年の台風による被害もあって、今回8年ぶりに全面修復しました。

修復に要した日数は約10日。茅750束、竹材約320本、シュロ縄200m、藁縄37巻、木材10本を用いました。最近では、茅葺きのできる職人が少なくなり、職人探しはもちろん、材料の茅を入手することも難しくなりました。特に茅は、遠くえびの市郊外の尾八重野産で、昨年2月、2週間をかけて刈り取られ用意されたものです。

作業は、古い茅を取り除いた後、腐食の進んだ千木や棟木、竹を取り替え、その上に新しい茅を葺き直すものでした。復元当時と同様の工法と外観で仕上げられました。

古代の姿を今にとどめる『西都原風土記の丘』の一隅に建つ古代住居。訪れる人々に、太古のメッセージを伝えています。(清水)

